NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.13【1】
2011〈春号〉

きのくに活性化センター
発行責任者／中田肇　発行日／2011年3月31日
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

東日本大震災からの教訓
—「想定」を超えた行動ができるような防災訓練を!—

和歌山大学防災研究教育センター長
教育学部教授
此松昌彦

今回の震災では親戚や友人で被災された方がおられ、被災地から親戚などを頼って和歌山へ来られている被災者がおられるかもしれません。心よりお見舞い申し上げます。さて和歌山に住んでいる皆さんは、今回の地震についてどのように考えたでしょうか。人ごとではなく、将来の和歌山をイメージした方もいるかもしれません。私から言わせれば、東日本の方から貴重な体験をくみ取り、絶対に無駄にしてはいけません。多くの方が亡くなる必然性もないのになぜ命を奪われなければいけないのか。二度と同じことを繰り返してはいけません。災害を防ぐことはできませんが、私たちの知恵で減らすことは可能なのです。これを考えることが防災・減災なのです。

では将来の東南海・南海地震に対応するために何をしたら良いのでしょうか。そのためには現場を知ることが重要です。何が起きているのかを知ることです。遠く離れている皆さんはメディアの情報を頼りにされているでしょう。もちろん重要ですが、記者なりの取材というフィルターを通していますので当然、すべてではありません。そのためにボランティアなどで実際に被災現場に立つことも重要です。ぜひあらゆる情報を入手して整理して下さい。おのずと自分たちに何が必要なのか明らかになってきます。今の私自身にはエネルギーの地産・地消というキーワードがおぼろげながら浮かんでいます。近いうちに、みんなで議論しましょう。

といいつつ、見えてきていることで話します。今回の地震で「想定外」という言葉をよく耳にします。どうのように考えますか。研究者レベルでは、今回の津波に近いものが約千年前に発生していたことは明らかになっており、警告していたのです。そこでは「想定内」ですが、残念ながらまだ国の委員会等で議論されて国の「想定」までになっていませんでした。このようなことから将来的には、皆さんの地域の津波ハザードマップや地震の揺れマップは現在より大きな「想定」のもとで変更される可能性があります。強く言いたいことは、ハザードマップはあるマグニチュードの設定値を入れた結果であって、実際にハザードマップのようになりますよと保証したものではありません。実際にはある「想定」を超えた大きなマグニチュードが発生する可能性もあるのです。今回の大きな教訓は、ハザードマップで「想定」されている範囲で満足するのではなく、それ以上の津波が来襲した場合まで「想定」して欲しいのです。そうしないと「想定外」のことが発生した場合に動けなくなってしまいます。ぜひ「想定」を超えた防災訓練を実施してほしいと思います。

CONTENTS

・東日本大震災からの教訓　此松昌彦　1面
・きのくに活性化センター活動報告　2面
・太田地域の活性化に向かって　石橋徹一　3面
・農村の持続的発展と課題　那智勝浦町太田地区　高橋淳子　4面
・ゆうはんのまちづくり報告　鈴木裕範　5面
・事業活動紹介　・きのくに活性化センターの構成図　6面

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.13【2】
2011〈春号〉

きのくに活性化センター活動報告

2009年4月～2011年3月

きのくに活性化センターは、センターとしての独自事業、また官公庁や各種団体からの委託事業に取り組むとともに、地域づくり団体や住民の皆さんと地域の現在・将来をともに考える活動を続けています。

2009

計画事業

委託事業

(1) **串本町の資源調査とマップの作成**(串本町商工会)
串本町の市街地活性化と新観光モデルの作成を目的に和歌山大学大学院生・学生による資源調査(タウンウォッチング)を実施し、「町なか歩きマップ」を作成、新観光モデルを提示した。

(2) **椿地区住みよいふるさとづくり研究会**
ふるさとづくり計画策定にかかるアドバイザー業務委託
(農山漁村地域力発掘支援モデル事業)
農山漁村地域力発掘支援モデル事業により、椿地区住みよいふるさとづくり研究会が主体となって策定する「ふるさとづくり計画」策定において、より住民参画型で実践型の計画を実現するためにアドバイザーを派遣した。

串本町と串本町古座の「町なか歩きマップ」

協力事業

(1) **「熊野地域文化検定」**(田辺商工会議所)
2009年に作成した「熊野地域文化検定」の実施にともなう講習会などに協力。

独自事業

(1) **廃校リストの作成並びに活用策の提言**
紀南地方を中心に和歌山県に存在する休廃校舎を地域づくりの拠点として活用するため和歌山大学生らの手で最新データを収集した。廃校活用の資料に。

串本町の資源調査(タウンウォッチング)

2010

計画事業

委託事業

(1) **串本町の「古座街道」マップの作成**(串本町商工会)
旧古座地区の活性化と新観光モデルの作成を目的に和歌山大学経済学部学生12人がフィールドワークを行ない、「観光マップ」を作成した(関連記事6面)。

(2) **聖地熊野を核とした癒しと蘇りの観光圏事業**
食文化創造事業・田辺市並びに奈良県十津川村における「食文化調査」(田辺市)

協力事業

(1) **和歌山大学授業への協力**
和歌山大学の南紀熊野サテライトと岸和田サテライトが共同で那智勝浦町で実施した大学院生対象授業「地元学特別講義」に協力。

食文化調査

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.13【3】
2011〈春号〉

太田地域の活性化に向かって

庄地区に広がる耕作放棄地

和歌山大学と「太田地おこし会」の協働耕作実習田

那智勝浦町・太田地おこし会
石橋徹一さん

2008年3月に50年ぶりにふるさと太田に帰郷した。かつての青々として脈々と広がっていた田園風景は影を潜め、変わって出現しているのは荒廃した休耕田であった。私の住む庄地区は約70%が耕作放棄地である。少子高齢化は知っていたが、これ程はっきりと限界集落に向かっているとはとても予想出来きなかった。今の状態が続くと、庄地区にとどまらず、太田地域全体の地域の暮らしに影響が及んでいくことに強い危機感を持つに至った。

地元の人たちも手をこまねいていた訳ではなく、危機感を持った農家が私の帰郷する数年前から休耕田解消に向けて活動し始めていた。そして、2007年6月に専業農家19軒で「太田地おこし会」を立ち上げる。私自身であるが、帰郷後聴講生として和歌山大学南紀熊野サテライトで地域経済や活性化について学ぶ機会を得てその縁を活かすとともに、「地おこし会」にも参加して地域振興策を模索している。

「地おこし会」は、石川県羽咋市神子原地の取り組みに学び、人工衛星を使った米の食味測定を実現、太田地区の米は研修地並のおいしい米(タンパク質含有量0.65以下)であることを科学的に実証した。現在、ブランド化にむけて各イベントに積極的に参加して「太田米はおいしい米」をＰＲし、「太田米」の名前は、徐々に浸透し始めるようになっている。

熱意や願いを、耕作放棄地解消に結びつけて実行に移していくためにはどうしても具体的な施策に取り組まねばならない。それには就農者の高齢化による後継者問題に早急に取り組む以外にない。太田地おこし会の最優先の課題は、何と言っても若い世代が農業に魅力を感じる就農環境の基盤の整備である。すなわち住宅の提供、農機具の調達の負担軽減、農業助成、支援、指導、そして高収益の仕組み等の受け入れ体制に取り組むことである。そのためには、若者の感性を正確に把握することから取り組むことが必要である。

そこで、和歌山大学と「太田地おこし会」が協働し耕作放棄地を実習田としてコメ作りをする計画を立て、昨年実施した。これによって、若い世代の農に対する考え方や感性を学び、そして若者の就農意欲に関わるデータの協力も得られ、私たちはこれを分析し農業担い手に適した農業環境造りに大いに役立てたいと考えている。

太田川の清流が注がれて耕作する米や農作物は無農薬栽培が主で、安全、安心、新鮮を消費者に提供している。今後さらに自分たちにしか出来ないこだわりの特産物、農産加工品を高値販売のレベルに引き上げたい。

地道な努力を重ねて行くことによって新規担い手が集まり、近い将来、休耕田が徐々に解消され太田地区全体に活性化の機運が盛り上がり、再び田園風景をとりもどして地域振興のモデル地域となることを願っている。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.13【4】
2011〈春号〉

農村の持続的発展と課題

～那智勝浦町太田地区の住民意識調査から～

きのくに活性化センター平成21･22年度研究員
和歌山大学大学院経済学研究科修了 高橋淳子

2010年7月から8月にかけて、太田地区において200名を対象に「集落における住民意識調査」を実施した（アンケート回収数187、回収率は93.5%）。地域での共同作業や暮らしについての質問をとおして、住民の自治組織に対する考え方、地域への思いを把握することができた。

太田地区においても人間関係の希薄化、農業離れが進行し、少子高齢化、人口減少の結果地域での祭りや伝統は継承できなくなり、休耕田や耕作放棄地も年々増え続けている。この傾向は、最近10年間でさらに加速し、1980年から経営耕地面積は減少し続け、2005年には約1／2となり、耕作放棄地は1.0%から30.1%と、現在耕作面積のほぼ1／3を占めている。たとえば、庄地区の場合、地区の7割がすでに耕作放棄された土地となっており、一人暮らし世帯や高齢化の増加が深刻な問題となっている。

10年後の集落の共同活動の状況についてたずねると、約8割の住民が、地域の将来について悲観的な見方をしていることがわかった。背景には、若者が減り、地域としての結束力は弱くなってきたことがあげられる。

太田地区でも地域活性化への関心は徐々に高まりつつある。「関心がある」と回答した人の中で、農村の美しい「景観を守っていきたい」と思っている人は50.5%、「どちらかといえば守っていきたい」と思っている人の21.8%と合わせると、7割以上の人が、ふるさとの景観を守っていきたいと考えている。しかし、景観を守る重要性を認めていても、実際に行動に移せていない人がほとんどであり、意識と行動には大きな差がみられる。

今後、太田に住む人々が地域再生に向け内発力を発揮するためには、地域住民みんなが、地域内の休耕田や耕作放棄地、また空き家の活用など多くの課題を、自らの問題として「自覚」し、共有することが重要となってくるだろう。地区がどのような方向へ進んでいくかは、地元の人々の意識と行動に関わってくる。地域の将来を少しでも光さすものにするためには、少しずつ芽生えてきている地域づくりの重要性を地域の人々が共有し、地域内での盛り上がりの機運を醸成していくことが大切である。そのためにも、既存の共同体を活用しながら、住民がまず自治組織のあり方を考え直し、思いを共有する。そして、住民自ら地域を自覚し、地域の将来を構想して主体的に地域へ参画できる自治組織を構成することである。

中山間地域が持続可能な発展を遂げるために、女性の意識変革を促し、女性の役員等への積極的な選任をはかったり、チーム編成を検討することが重要である。地域外のNPO、企業、行政や大学とのネットワークも大変重要になる、それらが地域に寄り添った視点で繋がっていくことが大切である。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.13【5】
2011〈春号〉

ゆうはんのまちづくり報告

コミュニティが創る。
「白い森」と田沢頭自治会の地域づくり

和歌山大学経済学部
鈴木裕範

小国町のタカキビ焼酎「白い森」には、清涼感をふくんだ甘さがあった。杜氏の技、そして東北の風土とそこに生きるひとたちの物語が、「キビ」という穀物の価値を再認識させる。

小国町は、山形県西置賜郡にある人口9,000人余りの町である。朝日、飯豊連峰に囲まれた南北に長い広大な面積を持つ山国で、冬には積雪が2～3メートルに達する。豪雪地帯が生みだす豊かな水に着目して水力発電所が建設、鉄道も整備されるなど早くからエネルギー供給基地として拓けてきた。また、コメを中心とした農業が営まれる一方、東北の伝統的な狩猟文化を継承する「マタギの里」でもある。いま、「裏日本」に位置する東北のこの町も、過疎と少子高齢化、産業が低迷するなかで地域の活性化と向かい合う。

田沢頭地区は役場からほど近い、36世帯119人が暮らす農村集落である。わたしを感動させたタカキビ焼酎「白い森」は、ここから生まれた。田沢頭に、地区の全世帯で構成する組織田沢頭グリーンネットがある。略称タグネットは、耕作放棄地の活用や景観保全、食などをテーマに「なごやかなむら」づくりに取り組む。その具体的な活動のひとつが、アワ、キビ、タカキビ、ヒエ、アマテラスなど、かつてこの国の多くの地域で栽培され、現在では忘れられた存在になっている穀物たち「雑穀」である。タグネットでは、2007年から耕作放棄による荒地対策として雑穀栽培に力を注いでおり、収穫した穀物は様々に工夫された料理に使われるほか、町内の菓子店が菓子に利用し「雑穀菓子」が人気商品になっている。いわば時代遅れの雑穀が、価値を再生産する。「白い森」は、そうした取り組みの中で、地元の地域づくり組織・おぐに五穀の会と連携、秋田県の酒造メーカーの協力で開発した。2010年4月から3,000本を販売し人気は上々、農商工連携の小国町ブランドのモデルとして期待が高まる。

「一人勝ちではなく、ちょっとずつ、汗流して、利益を得る仕組みを作る」。「雑穀の町」づくりを中心となって担っているのは、女性たちである。田沢頭自治会はこどもから高齢者まで全員が参加資格を持つ。「みんな平等」、役員は「活動してくれる人がなる」。女性の「やる気」を引き出す、いくつもの取り組みは「母ちゃんが元気だと、むらは元気」だからである。若者を積極的に役員に登用する。「目標を明確に定めて共有する」、合意形成には丁寧なワークショップを重視する。「白い森」を生みだすいくつもの取り組みは、その仕組みに学ぶことは多い。「白い森」は東北に広がるブナの森の代名詞である。リーダーの石垣正憲さんは、「地域は自分たちで何とかしたい」という。巨大災害の悲劇が襲ったこの春、東北の人たちが語る言葉のなかに「コミュニティ」の重要さをいく度も聞いた、わたしのなかで石垣さんの話が重なる。

ことしも、東北の山国から「白い森」が生まれる。今年の予約も始まるだろう。白く澄んだ空気の中にあるやさしさが誘う、急がなくては──。

タカキビ焼酎「白い森」と焼酎ようかん

田沢頭地区入口の標識

田沢頭自治会の拠点の集落センター

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.13【6】
2011〈春号〉

和歌山大学生が作った「熊野の港町・古座の道歩き」

作家・故司馬遼太郎さんが著書『街道をゆく6』で紹介した「熊野・古座街道」。古座街道は、すさみ町周参見と現在の串本町古座を結ぶ延長58.2ｋｍの街道。

街道の出発地であり終着地となった古座は、海運の時代―江戸・明治時代には廻船が行きかい、熊野屈指の港町として繁栄した。古座川河口の町は木炭や木材、林産物など熊野の山が生みだす富の集積地であった。

多くの人たちが歩き、司馬さんが歩いた古座・大辺路街道を、和歌山大学経済学部の学生らが歩き、その足あとをマップにした。

●内容

「女子学生の古座街道・大辺路街道案内」、「男子が訪ねる郷土の食とスィーツ」、ほか

ワークショップの模様

田辺・十津川の食文化を掘り起こす
和歌山大学学生が６地域で聞き取り調査

きのくに活性化センターでは、和歌山大学経済学部の協力を得て、2011年２月26日から５回にわたり「食資源と文化調査」を実施した。

これは、「聖地熊野を核とした癒しと蘇りの観光圏事業」の食文化創造事業の一環として、田辺市の委託で食資源を観光圏事業に活かす資料を得るために計画されたもので、和歌山大学経済学部の大西敏夫教授や経済学部２年生９人などが参加した。

調査は、田辺市江川・磯間をはじめ、旧大塔村、中辺路町、龍神村、本宮町そして奈良県吉野郡十津川村の６地域26ヵ所で女性を中心に住民から聞き取りを行なったほか、各地域の飲食店・宿泊施設・地域づくり団体から、地域の食材を活かした料理や食品・特産品の取り組みの状況等について説明を聞いた。調査結果は、報告書にまとめ、食と観光について提案した。

熊野地域文化検定試験

日程／７月31日(日)
場所／田辺商工会議所　会議室

あなたのふるさと熊野の知識度は？
田辺商工会議所は、本年度の「熊野地域文化検定」試験を7月31日田辺商工会議所会議室で実施する。
今年は2、3級に加えて、初めて１級の試験が行われる。
問い合わせは、田辺商工会議所検定事務局(TEL0739-22-5064)まで。

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。
(2011年３月１日現在)

- ●田辺周辺広域市町村圏組合
- ●新宮周辺広域市町村圏事務組合
- ●田辺商工会議所
- ●新宮商工会議所
- ●紀南農業協同組合
- ●和歌山県
- ●和歌山大学

編集後記

３月11日午後２時46分、東日本大震災が日本を襲った。編集子は、那智勝浦町太田に流れる警報で知った。その後、地震・津波による未曾有の災害、福島県で発生した東京電力福島原子力発電所損壊による放射能汚染が止まらない。この国難に、一人ひとりが立ち向かわなければならない。

筆舌に尽くしがたい悲しみの中で、被災地の人たちが教えてくれている多くのことがある。人であること、絆の力、コミュニティがあるということ。そして、半島の南に暮らすわたしたちは、南海道・東南海地震にも備えなくてはならない。2011年度のＮＥＷＳきのくには、災害とコミュニティ、地域づくりの紹介に力を傾けます。　（す）